ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ

森　昌弘
Frühneuhochdeutsch 研究会訳

ここに翻訳した『冗談とまじめ』は，1522年に刊行された Johannes Pauli: Schimpf und Ernst の最初の部分（第40話まで）である。Pauli 自身が書いた作品は693話，後の版で他の作家により付け加えられたのを合わせると878話となる。第41話以降は逐次翻訳発表して行く予定である。

『冗談とまじめ』は，16世紀ドイツで多数刊行された，シュヴァンク集といわれる散文による作品群の最初のもので，以後のシュヴァンク，その他の作品に大きな影響を与えたが，16世紀のみならず，17世紀や19世紀にも何度も再版され，さらにヨーロッパのいろいろな国でも翻訳されている。作者パウリは，その生年，没年共に不明であるが，大体生年は15世紀半ば頃，没年は1520年以降と推定されている。彼はエルザス出身の聖職者で，フランシスコ会派の司祭としてバーゼル，シュトラースブルク等で活躍したほか，当時有名であつた説教師 Johannes Geiler von Kaysersberg の説教を書き留め，編集して出版もしている。

使用したテキストは，1924年刊行の Johannes Bolte 編（リプリント1972）の版を用い，適宜 Hermann Östherley 編の1886年版（リプリント版1967），その他を参照した。なお聖書に関しては1987年刊行の『聖書新共同訳』（日本聖書協会）に拠ったが，パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，煩雑にはなるが異同を明かにするために，すべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この訳は，Frühneuhochdeutsch 研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1989年10月現在のメンバーの氏名は次の通りである。青木一行（名工大），大

沢峯雄（名大名誉教授），小幡剛隆（愛知医科大），木野茂（保健衛生大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名誉教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

森	序文，第1話—第2話	精園	第18話—第24話
山田	第3話—第5話	森	第25話—第29話
青木	第6話—第9話	中条	第30話—第32話
大沢	第10話—第13話	橋本	第33話—第36話
木野	第14話—第17話	森	第37話—第40話

冗談とまじめ

このようにこの本の名前がつけられました。この本は，人々をよくするのに役に立ち，適当な，まじめでおもしろい例やたとえ話と物語で，世の人々の行状にさっと目を通したものです。

支配者の特権を以て（市当局の認可を得て[1]）

印刷シュトラースブルク，ヨハネス・グリニンガー
キリスト生誕後の一五二二年，聖母マリア生誕の日完成[2]

1　原文はラテン語 Cum Privilegio Lmperatori で，（　）内は意訳であるが，シュトラースブルク市の参事会の許可をえて印刷されたことを意味している。

2　9月8日

序　文

さてここしばらくの間に過ぎ去った出来事や争い，さらに種々の混乱も，様々な書物によって明らかになりましたが，永遠の祝福や平穏な生活を述べた有益な書物は，しばらくの間眠っておりました。それらが主イエスの恩寵により，まもなく再び目覚めることは疑いのないことですが，その間に神父にして修道士ヨハネス・パウリによって，この本の話が収集されました。パウリは跣足修道会に属し，タンの修道院の説教師で，四十年の間世の中に出て説教をしていましたが，あらゆる本の中から見つけた話を拾い集めました。それは教会と世俗の両方の出来事にかかわる，六百八十の物語とたとえ話で，――「なくさないように断片を集めなさい。[1]」という，聖なる福音の言葉が果たされるようにと集められたものであります。

本の中で見つけたものを常に用いていても，何一つ新しいものを見つけ出すこともなく，また見つけたものを改良しないということは悲しいことです。この本は命名されて，「冗談とまじめ」という名がつけられています。その理由は，閉ざされた修道院にいる聖職の方々も，常に緊張していることはできないので，時々その精神を楽しませ休息させることのできるような読み物を持てるようにと，こっけいな，気晴らしになる，面白い実例がこの中にあるからです。また宮殿や山の上に住んでいるごうまんな人々も，その心を改め，まじめになって神を恐れるようになる例，さらには説教師が，眠たげな人々の眼を覚まさせて，聞く気を起こさせる話の種になるような例，また復活祭の劇の参考になるような例が，この中にあるのです。そして立派な説教にならない話は，ここには収められておりません。

この本の上述の収集者は，それを作った時の意図でこの本が読まれることを，逆に考えてはねつけたりしないで改良して話を増やし，ふさわしい品の良い別の話を加えて下さることを願っております。と言うのは，どん

1　新訳聖書　ヨハネによる福音書　第6章12

な人をも堕落させないようにと，沢山の下品で行儀の悪い題材に出会うと敬遠したからです。もし罰せられるようなものが入っていたら，主なる神，聖母マリア，聖フランシスコ，守護聖徒マルチン，そして天国のすべての天使，この本を作って称えようとした方々，さらにはあらゆる方々にお恵みとお許しを願う次第です。この本はタンの修道院で，わが主キリスト生誕後の一五一九年に作られたものであります。

冗談とまじめ

この二つを皆さんはこの本の中に見つけますが，それは気晴らしになる話と，どんな人でも手本と教訓を受け取ることの出来るようにということからなのです。この本はどんな人にも有益な本であります。

第一章　真実について

第一話　冗談
道化の背中の真実

ある城にやもめの貴族がいて，一人の若い道化を抱えていました。この貴族が馬で城から出かけると，下男下女たちはどんちゃん騒ぎをして，ご機嫌になりました。貴族が帰って来て，彼らが食卓に座っていると，彼は留守の間になにを食べたり飲んだりしたかをすべて指摘して，嘲笑するように「樽のワインの味はどうだ」などと，尋ねました。

ある時この貴族が馬で出かけると，下男の一人が言いました。「殿様が外出している間おれたちがなにをしたのか，殿様に話す裏切り者が中にいる。それで殿様は，なにを食べたり飲んだりしたのか全部分かるのだ。」別の下男が言いました。「それをやるのは道化だ。殿様は帰られると，奴にあらゆることを尋ねる。それで彼が知っていることを言うのだ。」前の下男が彼に答えて言いました。「そんなことをしないように，おれが道化に教えてやる。」そしてある時貴族が馬で出かけると，彼らは道化を地下室に連れて行って，着物を脱がせて裸にし，一本の柱にしばりつけ，しっかりしたむ

ちで叩きました。そして道化の背中を一打ちする毎に言いました。「さあ見ろ，これが真実だ。本当のことを言ってみろ。お前が道化なら，間抜けたことをやってみろ。さあ見ろ，これが真実だ。」こうしてから，彼らは道化を帰してやりました。

貴族が戻って着替えをしている時に，いつものように「私の外出中無駄なことはしなかったか」と，尋ねました。道化は黙って何も話そうとはしないで，指を口に当てて，「しっ，しっ，しっ」と言いました。長い間問いただした後で，貴族が言いました。「さあ，私に真実を言え。」道化は真実という言葉を耳にすると，こう叫びました。「人殺し，人殺し。世の中で真実より悪いものはない。わしに真実という言葉を言わないでくれ。」――「なぜだ」と，貴族は尋ねました。道化は言いました。「なぜだかわしの背中に書いてある。」貴族が道化に着物を脱がせると，何も言いたくなくなるように扱われた様子がよく分りました。

第二話　まじめ
いかに多くの人が真実を言わないかということ

本当のことを言う人は憎まれるものですから，誰も真実を語る人はおりません。ところが愚か者はすべての神父を侮辱し，むちや棒で打たれます。しかし神父たちは今は真実を語りません。またむちや棒で打たれた神父は一人もいなかったし，これからもいないことでしょう。これは彼らがどんな人でも，特に上流階級の人々を怒らせないようにするということからだけなのです。それで洗礼者ヨハネのように，ヘロデに次のように真実を述べる神父は，ほとんどいないのです。[マルコによる福音書第六章，マタイによる福音書第十四章]「汝の兄弟の妻を，兄弟が生きている間にめとるのはよろしくない。」ヨハネはこの言葉に死を見ていたのでした。云々。――同じようにこの地上には，聖アンプロシウスのような人はもういないのです。彼は皇帝テオドシュウスを聖壇から追放しましたが，皇帝が行った即決の裁きのために，皇帝を罰したのです。

第三話　冗　　談
三人で目が三つしかないこと

かつて，一人の山師だか香具師だかがおりました。ある晩遅くこの男は百姓の家の前の丸太に腰掛けていました。百姓は畑から戻ってくると，その若い衆が腰を下ろしているのを見つけて，話しかけました。「お若いの，お前さん何でそんなところに座っているんだね。どうして夜の星空天井の下にいなくてもいいように，家の中へ入って行かないんだね。」若い衆は言いました。「親切なお百姓さん，私には一つの癖があるんですよ。私は村中を捜し歩きましたが，誰も私を泊めてくれないのです。私は本当に今夜はここにいたいのです。明日はきっともっと良くなることでしょう。」百姓は言いました。「お前さん，それはどんな癖だね。」若い衆は言いました。「私は誰にでも真実を言ってしまうんです。だから誰も私を泊めてくれないんです。」百姓が言いました。「それはよい癖だ。中に入りなさい。お前さんは私の大切なお客様だ。十分寛いでおくれ。」

若い衆は百姓と一緒に家の中に入って行きました。百姓は言いました。「おいグレタや，ケーキとパンを焼いておくれ。お客さんだよ。」こうして彼らが食事をし，そういった時に村々でするように，火のそばに腰を下ろしていた時，若い衆はどんな暮し向きであるかを観察しました。すると，家の中には，片目に眼帯をした百姓と，片目しかないその妻グレタと，片目のただれた猫一匹以外には誰もいませんでした。さて，食事のまっ最中に，百姓が言いました。「なあ若い衆，お前さんはいつも真実を言うと言いなすった。私にも真実を言っておくれ。」若い衆は言いました。「ああご主人，あなたは私に腹を立てて，気を悪くなさるでしょう。」百姓が言いました。「いいや，そんなことはないさ。」若い衆が言いました。「あなたと，奥さんと，猫は皆で三つしか目がありません。」百姓はこの真実を聞いた時，火かき棒をひっ摑んで若い衆を家から追い出してしまいました。

このように，まだ地上では予言者ホセアが第四章で言っていることが真実でありうるのです。[Non est veritas（真実はない）]「地上には真実も慈悲もない。」この例は，時としてあまり役にも立たず，むしろ害をもたらすような，黙っていたほうが良かったような，ひょっとしたら喧嘩や不和を

もたらすような真実を言う，多くの人々や聖職者達に向けられたものでもあるのです。真実というものは非常に高貴なので，聖パウロが『テモテへの手紙　二』の第二章で言っているように，すべての人に，すべての場所で，すべての時に語られるべきであるとは限らないのです。[Servum autem Domini etc.（しかし主の奴隷は云々）]「主の奴隷にして僕たるものは争わず，すべての人に柔和に接し，教えることができ，よく忍び，真実に逆らう者を優しく教え導かねばなりません。」云々。

第四話　冗談

四人の乙女が三つの元素に住んでいたこと

ある時四人の若い娘たちが集まって来て，お互いに仲良くおしゃべりをしたり，ふざけあったりして，上機嫌でした。一人の娘が他の三人に言いました。「ああ，今私たちは皆幸福だわね。もしまたお互いに会いたければ，私たちは再びどこで見つけることができるでしょう。」一人の娘は火［イグニス］という名前で，もう一人は水［アクア］，三人目は空気［アエル］，四人目は真実［ウェリタス］という名でした。

「ああ」と一人が言いました。「火さん，私達はどこであなたを見つけることができて。」火は言いました。「固い石の中よ。そこを鋼で打ってごらんなさい。そうしたらあなたがたは私を見つけるわ。」そして火は言いました。「空気さん，私達はあなたをどこで見つけることができて。あなたのお家はどこ。」空気は言いました。「あなたがたは木の葉が震えて動く所を見なきゃだめよ。そこにあなたがたは私を見つけるわ。」それから空気は言いました。「水さん，私達はどこであなたを見つけることができて。あなたのお家はどこなの。」水が言いました。「あなたがたが芦を見つけたら，根本を掘ってごらんなさい。そこにあなたがたは私を見つけるわ。私のお家はそこよ。」そして水は言いました。「ああ，高貴な真実さん，私たちはどこであなたを見つけることができて。」真実は三人の娘ら皆に答えました。「ああ，皆さん，あなたがたは，自分を見つけることのできる場所を話してくれたわ。でも，残念だけれど私には自分の家がないのよ。誰も私を泊めてくれようとしないわ。私は誰からも憎まれているの。」[ホセア書第四章：Non est veritas etc.（真実はない，云々）]

第五話　まじめ
下僕に暇が出されたこと

かつて色好みの金持ちの男がいて，一人の下僕を抱えておりましたが，この下僕はもう長年この主人の所におりました。もう一人別の金持ちの男がおりましたが，この人もこの下僕を手に入れたがっていました。下僕は言いました。「私はあなた様の下でご奉公したいのですが，ご主人がお暇を下さいません。」金持ちの男は言いました。「真実を言うようにしてみなさい。そうしたらお前の主人はお前に暇を出すだろう。」下僕は言いました。「やってみましょう。」

その後間もなく，主人が下僕に言いました。「行って，女に私のところへ来るように命じなさい。」下僕は言いました。「ご主人様，それは姦通です。あなたはそれをすべきではありません。」云々。そして下僕はいつも真実を言いました。ある時主人は言いました。「お前と私はもう一緒にやっていけない。私にはお前が分からなくなってしまった。だからこちらへ来なさい。給料の清算をしよう。」そして主人は下僕に支払いをし，暇を取らせました。こうして下僕は自分に助言してくれたもう一人の主人のもとへやって来ました。

それについて宗教的に見ると，真実は自分の宿を持たず，誰も真実が語られるのを喜んで聞きたがりません。その原因を主キリストが福音書の中で言っています。[マタイによる福音書第十章[1]: Nemo potest（誰も... できない)]「誰も互いに反目しあっている二人の主人には，仕えることができない。」それ故に世の人々はすべてほとんど間違っていて，不実の主人に仕えています。それで，各人がもう一人の主人である真実を憎み，誰ももはや真実を泊めようとはしないのです。

第六話　冗談
鰻のことで告げ口したかささぎのこと

ある所に身分の高い貴族がおりました。絶えず客が来ましたので，常日

1　実際は第6章24

頃から，たとえば若鶏や塩漬け肉，生け簀飼いの魚など，なにがしか珍味の品を，賓客の思いがけない来訪の折りふしに差し出せるよう用意しておりました。客もないままにつくねんとしているよりは，料理の皿数が一つ増えることでもあり，来客のある貴族にとって，それは満足なことでありました。

ある時，立派な鰻を桶に放しておきました所，外出しなければならなくなって家をあけた留守ちゅう，彼の妻は遊び仲間である隣家の奥方の所に出かけて行って，こう申したのでした。「奥様，私は鰻が食べたくてなりませんの。主人が一匹，鰻を桶に放しておりますが，もし奥様がお相伴して下さるなら，大盤振る舞いをしようではありませんか。後は川獺（うそ）が食べてしまったとでも言っておけば良いわ。」隣家の奥方に否やはありません。二人は思い思いにあるいは煮たり，あるいは焼いたりと鰻の拵えをいたしました。

さて，貴族は馬で家に戻り，衣服を改めておりました。彼は人間の言葉を喋るかささぎを一羽，籠にいれて飼っていましたが，このかささぎは貴族にこう申しました。「旦那様，奥様は鰻を煮たり焼いたりして食べてしまいましたよ。」貴族は今や衣服を脱ぎ終え，かささぎの言うことを信じるつもりは無かったものの，桶を覗いてみると，鰻は消えてしまっていました。貴族は怒って妻に言いました。「これ，そなたはなんと食い意地の汚い人なのですか！　客を持て成すために私が飼っていた鰻を，なぜ食べてしまったのですか。」

妻は言いました。「私はその様なことは致しません。もし鰻がいなくなっているのなら，川獺どもが食べてしまったに相違こざいませんわ。前にもそんなことがございましたよ。」貴族は言いました。「やはりそなたの仕業というたはまことであった。鰻を食べた川獺だかむじなだかは，そなただったのだ。かささぎが私にそう申しておったわ。」

かささぎがご主人様に告げ口したと聞いて，奥方はその鳥が憎くてたまりません。貴族がまたしても馬で外出されると，一緒に鰻を食べた隣の奥方を呼び寄せ，かささぎの頭の毛を毟り取って，坊さんの中剃り頭のようにしてしまいました。本当はむしろ打ち殺してやりたい程でしたが。その後，例の鳥はハゲ頭の男や中剃り頭の坊さんを見ると，その人に向かって

こう言うのでした。「あんたもやっぱり鰻のことを喋ってしまったのだね。」

第七話　冗談
ベーダーが十二の文字を解釈したこと

尊師ベーダーについて，こんな話を読みました。ある時，一つの大きな事件が起きたので，ローマの元老院が会議を開きました。ある壁に十二の文字，即ち三つのP，三つのS，三つのR，三つのFが現れたのでした。賢いローマ人たちにも解釈できず，そこで当代きっての学者と目されていた故をもって，ベーダーを招き，例の十二の文字を説明してもらおうという提案がなされたのでした。ベーダーは十二の文字を見て，次のように解釈しました。「三つのPはPater Patriae Profectus（祖国の父は前進す）で，これをドイツ語で表せば，まさに『祖国の父は彼方に去れり』としか書けません。また三つのSはSapientia Secum Sublata（英知は彼とともに去りぬ）です。即ち『智は彼と共に消えさりぬ』の意味です。また三つのRはRegum Romae Ruet（ローマ帝国は崩壊せん）です。これは『ローマ帝国は瓦解し消滅せん』の意味です。そして三つのFはFerro Flamma Fama（鉄，炎，飢えによって）です。つまり『武器と火と飢餓によりて』の意味であります。」ローマ人が幾人かの敬虔で賢い人々を追放してしまったので，それについてベーダーは述べたのでした。ローマ人たちは十二の文字の解釈を聞くと怒ってベーダーに飛び掛かり，彼の両眼をくり抜いてしまいました。でも結局ベーダーが解釈したようになりました。これが彼の受けた報酬，説教の謝礼でありました。

誰でも敢えて真実は述べないもの，誰でも真実を聞きたがらないものということこそ真相なのであります。

第八話　冗談
神像の首が打ち壊されること

誰かが盗みを働くと，その旨を述べ立てる柱像についてウァレリウスが書いております。ある男がある日，聖堂の中で盗み心を起こしました。彼は神の像の前に進み出ると，金槌を取り出し像を脅しました。「もしおれの

ことを言いつけたら，お前の頭をこの槌で打ち砕いてやるぞ。」像は真実を言わねばなりません。そこでこう申しました。[Tempora mutantur, homines deteriorantur, et qui vult dicere veritatem, frangitur sibi caput.（時は変わり，人間は悪くなる。真実を言わんとする者の頭は打ち砕かれる）]「時は移ろい，人の心は退廃せり。いま真実を語らんとする者の頭を砕かんと欲するや。」

第九話　冗談
三羽の雄鶏が密通を知らせて鳴いたこと

私達が読むのは，この家の女房が間男と同衾していた夜，三羽の雄鶏が金切り声を挙げたということと，その家の下女が鶏の鳴き声の意味を悟ったというお話です。一羽の雄鶏が最初の夜ときの声を挙げました。「わしらが家の奥さんは旦那さんを裏切っているぞ。」

このことを下女は女房に話しました。「そんな雄鶏は殺してしまわねばならない」と，女房は言いました。そしてその雄鶏は炙られてしまいました。二番目の雄鶏が次の夜歌いました。下女はその意味を問われた時，解釈して言いました。「わしの仲間は本当のことを喋ったために死んでしまったと，あの雄鶏は叫んでいましたよ。」女房は言いました。「そ奴も殺してしまわねばならない。」そしてその雄鶏も炙られてしまいました。女房が間男と寝ていた時，三番目の雄鶏が叫びました。下女が解釈したところによれば，[Audi, vide, tace, sie vis vivere in pace（聞け，見よ，沈黙せよ。汝が平穏に生きんと欲するならば。）]「もし汝，安らけく生きんと欲さば，見よ，聞け，而して沈黙せよ」と，いうことでありました。

第二章　良い娘と悪い娘について

第十話　冗談
女，コートを惜しんで泣くこと

一人の若い貴族が，勉強しなさいと言われて，大学という高等の学府に入っていました。この貴族，あるよからぬ女を追い回し，自分の持ち物を女と二人ですっかり使い果たしてしまいました。あげくのはてに，女とお

別れの食事をしようとして，女とその母親を招きました。さて食事がすむと，貴族はお別れに恋人を抱くと，そのまま行ってしまいました。すると娘は泣きだして，まことにあられもない有様でした。母親は女を慰めて言いました。「お前，泣くのはおやめ。ここには，きれいな学生さんがまだ大勢いるよ。よかったらほかの学生さんを世話してあげるよ。」娘は答えて言いました。「お母さん，あの人が行ってしまったから泣いてるんじゃないの。あの人が着ている，銀の締め金のついた上等のコートも食べてしまわなかったことが悔しくて，あのコートが惜しくて泣いているのよ。」

自分の子供をこんなふうにしっかり教え導いたのは，優しい母親でした。大学生や独身者達もこのことを学んで，こういう人々を相手にしないようにするべきでしょう。この仲間はただお金だけを求めるのです。こんなふうに書いてあります。[Venus ex omuni gente tributa petit.（ヴィーナスはすべての人々から租税を要求する)] つまり「よからぬ女どもはどこの国でも金を欲しがる。金を貰わずに悪魔のものになろうと言うものは誰もいない。」というわけです。

第十一話　まじめ
修道女，自分の目をくりぬくこと

ある時，ある修道院に一人の修道女がおりました。そこでは一人の貴族がその修道院の管財人をしておりました。修道院にいた一人の修道女がたいへんその貴族のお気に召して，ことのほか好きになり，修道院長に，その修道女を自分のところへよこしてくれと手紙を書きました。何度手紙を書いてもそれは実現しませんでした。そこである時，その修道女を自分のところへよこすように，馬と家臣と使者を遣わし，そのあとさらに手紙を書いて，そうしてくれなければ，修道院に火をつけて中の修道女をみんな焼き殺してやると言いました。ああ，なんということを。修道女たち，この信心深い神の子達は悲しくなりました。争いのもとになった修道女は自分で使者のところへ来て，いろいろ言った中で特にこう言いました。「お使いの方，あなたの若様は，他の修道女よりもこの私をお望みとは，私のどこをご覧になったのでしょう。この中には私より美しい方々がおられますのに。」使者の一人が答えて言いました。「修道女様，あなた様の目がこと

のほかあの方のお気に召したのです。」云々。

修道女は使者達に言いました。「少しお待ち下さいませ。すぐにご返事申し上げましょう。」こう言って中に入ると，修道女は両眼を自分でくりぬいたか，人にくりぬかせたかして，その眼を小箱にいれて錠をかけ，それに添えてほかの修道女の手でこう手紙を書きました。「では，この私のお気に召すところをお受け取り下さい。そして私と修道院をそっとしておいて下さい。」

さて使者達が小箱を貴族に届けると，貴族は小箱をあけて手紙を読みました。そして手紙を読み小箱の中の眼を見た時，神の恩寵が貴族の上に下り，貴族は前非を悔いて泣き始めました。すると二つの大きな霊兆が現れました。貴族は，泣き悔い改めることによって自ら純潔を手に入れ，貴族がその眼を受け取った修道女にはほかの眼が生じて，再び視力を回復しました。

こういう修道士や修道女は今では大勢おりません。何しろこの修道女は自分の純潔によってほかの男に純潔を手に入れてやり，自らは，再び視力を回復すると言う大きな霊兆を得たのです。

第十二話　まじめ
四十二人の修道女，自分の鼻をそぎ落とすこと

私達はこんな話を読みます。アコンと言う町が不信の徒に包囲されました。町には女子修道院があって，そこの院長は集会のために鐘を鳴らさせました。さて修道女達がすべて集まると，院長はみんなに向かってこう言いました。「皆さん，いよいよ不信の徒が侵入して来ようとしています。私達が賢明に行動するのでなければ，あの人達は，まず私達の魂を，それについで肉体を滅ぼしてしまうでしょう。しかし皆さんが私に倣って，私のする通りにしようとなさるなら，私達は肉体も魂も汚されなくてすむのです。」修道女達は声を揃えて言いました。「院長様，おっしゃる通りにいたします。」すると院長はナイフの鞘を払って，自分の鼻をそぎ落としました。修道女達は皆それに倣い，誰一人一番悪い女になろうというものはおりませんでした。その数およそ四十二人でした。不信の徒が入ってきて修道女達がそのように不具なのを見ると，修道女達をそっとしておきまし

た。

これは立派な修道女達でした。不安におののきながら，純潔を守って自分を不具にし醜くしたのです。今私達の修道女はどこにいるのでしょう。実際，今眼をくりぬいたり，鼻をそぎ落としたりするでしょうか。そんなことよりも，自分で男達を刺激し，あとを追い回すでしょう。飾り立て磨き立てて，まるで世俗の娘達がするのと同じで，もう区別がつかないくらいです。しかし修道女達の純潔は口の中にあるだけで，このあと読むあの娘達と同じなのです。

第十三話　冗談
一人の女，樽の中で「くっくう」と叫ぶこと

ある時，一人の貴族がいて，ある百姓の娘に言い寄りました。二人は意気投合しました。そして，貴族が馬で来て娘を城へ連れて行く日が決められました。さて貴族が来て見ると，戸口が開いていて，中には誰もいません。家の上下へ呼んでみても，娘の声は聞こえません。貴族は考えました。「これは駄目だ。娘はお前をだましたのだ。帰るほかあるまい。」このままなら娘は男から純潔を守ったことでしょう。ところが貴族が家の戸口から出て行こうとすると，娘は樽の中に入っていて，樽の栓口から「くっくう，くっくう」と叫びました。貴族は「そこにいたのか」と言い，娘を出して，自分のうしろに馬に乗せ，城へ連れて行きました。

この娘は，このあとに出て来る女と同じく，純潔を口に持っているだけでした。

第十四話　冗談
三人の娘が手を洗うこと

ある時一人の市民がいて，その男には三人の娘がありました。娘達はみな，聖なる結婚という重大な定めをつけなければならない年頃になっていました。でも父親には，どの娘を最初に結婚させたらいいか分かりませんでした。というのも，娘達は三人とも求婚者があったからです。父親は娘三人を呼び集めて言いました。「さあ娘達よ，お前達三人に一緒に水をあげよう。手を一緒に洗いなさい。手をタオルで拭かないで，自然に乾かしな

さい。手が最初に乾いた者に，まず夫を世話しよう。」父親は娘達三人の手に水を注ぎました。娘達は手を洗い，手を自然に乾かしました。でも一番下の娘は手をひらひらさせて，言い続けました。「夫なんて欲しくないわ。夫なんて欲しくないわ。」こんなふうに手をひらひらさせたので，その娘の手がまっさきに乾き，最初に夫が与えられました。年上の娘達の方は，もっと待たなければなりませんでした。

謎々もあります。こんなことが言われます。「何であるか当ててごらん。なせば生ずるが，なさなくても生ずるもの。」それは手を乾かすことです。タオルで拭けば，手は乾きます。拭かなくても自然に乾きます。この娘も，純潔をただ口にするだけで，心の中は違っていました。だから娘はずる賢く，まっさきに手が乾くように，手をひらひらさせたのです。云々。

第十五話　冗談

娘が強盗に襲われて大声をあげること

ある時一人の年頃の娘がいて，その娘が司教区主席判事である裁判官のところへやって来て，若い男に操を汚し辱められたと，純潔を奪われた件で，男を告訴しました。裁判官は言いました。「娘さん。その件はその男がいなくては解決できません。その男にも出頭してもらわねばなりません。家へ帰って明日この時間にもう一度出かけて下さい。その男にも出頭するよう命じます。」娘は帰宅しました。主席判事の裁判官は，廷吏に娘の後を追わせました。廷吏は娘を襲い，娘からヴェールや財布などを奪い取るふりをすることになっていました。実際その通りのことが起こりました。

翌日娘が再度出頭し，強盗がそこにいるのを見ると，私が抵抗しなかったら，その男は天下の大道で私に強盗を働こうとしましたと，娘はその強盗を告訴しました。裁判官は言いました。「その男から身を守ることができましたか。」娘は言いました。「ええ，私が大声をあげたので，路地や家々から人々がかけつけて来て，助けてくれたのです。」裁判官は娘に答えました。「あの若者が乱暴を働き，あなたを自分の意のままにし，操を奪おうとした時も，そんなふうに大声をあげたら，人々があなたを助けにかけつけてくれたでしょう。だから娘さん，もう行きなさい。あの若者には責任はありませんよ。」

第十六話　冗談
若い娘に五シリングが与えられること

娘が辱めをうければ，それは法律上今でも大変なことですが，昔はおそらくまったく大変なことでした。とりわけ大都会では，母親に娘があったりすると，母親がおそらく自分から娘を金持ちの坊主や貴族のところに送り出し，また洗濯女として送り込み，あげくの果てに，その人達からお金を脅し取ったり，その人達を法廷に引っ張り出す等して，それが濫用されるにいたりました。

第十七話　冗談
二人の娘が一人の若者に童貞代を支払うこと

さてある時，ヴュルテンベルク侯国のある村で，一人のお金持ちの百姓が亡くなりました。百姓には容姿の美しい若い息子がありました。その村にはまた，とても美しい娘が沢山いました。娘達は，どうしたらその金持ちで容姿の美しい若い男を夫にできるか考えました。そしてその男のために小さな花輪を作ったり，その男を追いかけたり待ち伏せたりしました。どの娘も，男が自分を妻に迎えるべきだと思いました。でもその男にはそんな気配はありませんでした。娘達は男がそれを望んでいないことが分かると，みなその願い事をあきらめて，もうその男を追いかけませんでした。でもあきらめきれない二人は別でした。二人の娘は共に，男がもう一方の娘を妻にすることを恐れ，互いに憎み合い，相手の様子をうかがいました。たまたま一人の娘が，別の娘が窓から金持ちの若者のところへと入って行き，事実そうなったのですが，夜のあいだ男と同衾しようとしているのを嗅ぎつけました。もう一人の娘も，同じ窓から中へ入って行き，最初の娘と同様，同衾しようとしました。若者は二人の娘の間に横になり，それぞれの娘に子供を作り，二人とも妊娠し，どの娘も彼との結婚を求めました。

その事件が村の法廷へ持ち込まれ，お偉方達は，当時高等裁判所が置かれていたシュトゥットガルトの裁判所へ，その事件を付託しました。そこのお偉方達は，その事件をコンスタンツの司教区裁判所へ付託しました。そこの主席判事は，その事件を村の裁判官達に差し戻して，村の裁判官が

判決を言い渡し，判決を確定するようにと命じました。そこで村の裁判官達は，二人の娘は若い男に童貞代を支払うように，男には責任はない，娘達は今後も娼婦と呼ばれなければならないと，判決を下しました。判決が上述の場所へ書き送られました。お偉方達は，聖職の者も世俗の者も，それが立派な判決であると認め，それが確定しました。

第三章　父母の教えについて

第十八話　冗談
爪が木から抜けなかったライオンのこと

年老いたライオンがいました。このライオンはもう獲物をうまくとることができず，洞穴の中で寝ていました。ライオンには息子が一人いて，当然のことながらこの息子が父親を養っていました。年老いたライオンは若いライオンに教えを授けて，こう言いました。「親愛なる息子よ，人間と決して戦わないように気をつけろ。人間とは係わり合うな。人間はどんな動物よりも強いのだから。この教えを守っていればうまくやっていけるだろう。」

若いライオンは自分を強いと思っていましたので，父の教えを気にしませんでした。そして外出して，是非とも人間を見てやろうと思いました。すると二頭の雄牛が並んで一つの軛（くびき）につなぎ合わされているのを見つけました。ライオンは雄牛に言いました。「お前たちは人間か。」「いいや」と，雄牛が言いました。「だがおれ達をつないだのが人間だ。」先へ行きますと，ライオンは馬具をつけた馬一頭を見つけました。この馬にはしっかりと蹄鉄が打たれ，背には鞍が置かれ，口には手綱がつけられて，木につながれていました。ライオンは馬に言いました。「お前は人間か。」馬は言いました。「いいや，だがおれをつないだのが人間だ。」

更に行きますと，ライオンは一人の百姓が森の手前で木を切っているのを見つけました。ライオンは言いました。「お前は人間か。」その百姓は「そうだ」と，答えました。「よし，それなら支度しろ。勝負してみようじゃないか。」百姓はライオンに言いました。「あんた，木を割るのを手伝ってくれないか。その後でならあんたのしたいようにしよう。」百姓は目の前の木

に斧で一撃をくわえて裂け目をつけ，ライオンに爪でその木を裂く方法を教えました。ライオンが爪を裂け目の中へ入れると，百姓は斧をそこから引き抜きました。だから裂け目は再び閉じ，ライオンは前足を挟まれてしまいました。百姓は村の方へ走って行き，大声をあげました。「ライオンだ，ライオンだ。」百姓達は皆，槍や，熊手や，棍棒を手にして，村からライオンめがけて駆けつけました。ライオンは命の危険が迫ったのを知り，前足を引き抜いたので，爪は木に挟まれたままとなりました。ライオンは大変に痛い思いをして百姓達から逃れ，父親に血まみれの前足を見せて言いました。「お父さん，あなたの忠告に従っていたら，こんな目には会わなかったでしょう。あなたがおっしゃった通りの目にあいました。」

第十九話　冗談
父親の鼻を噛み切った息子のこと

このように若者は両親の言葉を信じ，それに従うべきです。さもないと刑吏の後に従うことにもなるでしょう。若者が財産を無駄なことに使おうとも，世間の人はその若者がすることを傍観し，手伝ったりします。散財するのを手伝ってくれる連中さえいるのです。しかし若者が物乞いして歩かなければならなくなると，若者は財産をなくしたうえに物笑いの種となり，父親の鼻を噛み切ることになるのです。

ボエチウス[1]の書き伝えている男がそれを行いました。この男は死刑に処せられる直前死ぬ前に父親に口づけしたいと望みました。父親が息子に頬を差し出すと，息子は父親の鼻を噛み切って言いました。「もしも父さんが僕を若い頃に叱ってくれていたら，僕も駄目にならずにすんだのに。」この息子は叱って欲しかったと言っていますが，若い頃にはその叱責を無視したのです。

両親の忠告や教えを軽んじ，気にかけない人々がいて，忠告や教えはその人々の一方の耳から入って，他方の耳から出て行ってしまうのです。こういう人々は私達が次の話で読むライオンと同じです。

1　ボエチウス（480－524）イタリアの哲学者「哲学の慰め」の著者

第二十話　冗談
息子達に三つの教えを授けたライオンのこと

あるライオンの話をします。そのライオンには息子が二人いました。ライオンは息子達が暮らしていけるようにしてやろうと思い，二人に嫁をもらってやりました。そして結婚祝いとしてめいめいに森と，二人が守るべき三つの教えを授けて言いました。「息子たちよ，喜べ。お前たちに従わない動物はいない。ただ人間だけは用心せよ。人間と喧嘩をしてはならない。人間は強さの点ではどんな動物にも勝っているからだ。次に，隣人達とは平和に暮らしていけ。第三に，わしがお前達に与える森を大切にせよ。動物達がその森で子供をふやせるように。お前達がこの三つのことを実行し，三つの教えを守るなら，お前達はうまくやっていけるだろう。」この後父親の老ライオンは永久の眠りにつき，葬られました。

兄は父親の教えを守って暮らしました。しかし弟は自分の森に住んでいる者達と喧嘩，口論を始めました。ある時弟は自分の妻や身内の者達と大喧嘩をし，その怒りは森の動物達にも及び，多くの動物の息の根をとめて，殺してしまいました。他の動物達がこの事件を見たり，聞いたりして，皆そこから逃げ出しました。

この有様を見た弟は，ある時兄を訪問し，兄のやり方を見学したいと思いました。そして兄のところへ来て言いました。「兄貴，おれのほうはさんざんなのに，兄貴のほうは金まわりがよく，うまくいってるのはどうしたわけなのだろう。」兄は弟に答えて言いました。「おれが父さんの教えを守っているからさ。ところがお前はそれを守らず，お前の森で暮らしている連中と喧嘩，口論ばかりしている。そして森を大切にしないから，動物達はお前のところから逃げて行くのだ。」そして弟を自分の森へ連れて行き，中の様子を見せました。二人が森にやって来ると，野生の動物達が大群をなして移動して行くのが見えました。そして二人が森の中を長い間あちこち歩いていると，人間が一人目にとまりました。それは猟師で，罠をしかけて，動物を捕らえようとしているのでした。その時年下のライオンが兄に言いました。「兄貴，あそこに百姓が行くのが見えるだろう。あいつは兄貴に危害を加えようとしているんだ。行って，奴を引き裂き，食べて

しまえ。」兄は弟に答えて言いました。「父さんはおれ達に教えてくれたじゃないか。人間と係わり合ってはいけない，人間は見て見ぬふりをし，人間と喧嘩をせずに暮らしていけと。」すると年下のライオンは言いました。「耄碌（もうろく）した親父の言葉で兄貴は自分の力とライオン魂を捨てようというのか。親父の頭は以前からおかしくなっていたんだ。おれは行って，奴を引き裂き，食べてやるぞ。」こう言うと弟は駆け出しましたが，自分の足元をよく見なかったので，猟師がしかけた罠にかかってしまいました。そして捕らえられ，殺されたのです。

第二十一話　まじめ
酒が飲みたくなった男のこと

同様に，息子，子供のなかには，親の教えや忠告を全く無視して顧みず，親から受け継いだ物を飲む，打つ，買うで蕩尽する者がおりますが，世間の人々はこうした人の行いに口を挟まず，それどころかこうした人の乱行を手伝う悪友もいるのです。しかしこうした人が，親の教えを無視して財産すべてを蕩尽した，例の放蕩息子[1]と同じ身分になった時，どうなるでしょうか。

ヴェニスのある金持ちの市民に息子が一人いました。その息子はまったくの飲んだくれで，いつも酔っぱらっておりました。ある時その父親が市参事会から会員達と出て来て，とある建物にやって来ますと，そこに一人の酔っぱらいが板の上に裸でだらしなく寝そべっており，人々の嘲笑をかっていました。例の立派な父親はこう考えました。「この酔っぱらいが，かくも恥ずべきあさましい姿で寝ているのを見れば，お前の息子も改心して，こんなことをしないように気をつけるだろう。」そこで下男に息子を呼んでこさせました。そして息子がやって来ますと，父親は息子に酒の飲み過ぎを慎むべきであると説教し，小言を申しました。父親が長時間にわたって説教したので，息子は喉がかわき始めました。そこでそこに居合わせた人々にこう言いました。「あの男はどこでそんなに酔っぱらったのですか。そのいい酒はどこで飲ませてもらえるのですか。私も一杯あやかり

1　新訳聖書　ルカによる福音書　第15章第11節以下参照

たいものですが。」

第二十二話　冗談
窓から小便をした男のこと

ある金持ちで，市参事会の一員でもある名士に息子が一人おりました。その息子はいろいろな子供じみた愚行をはたらいていました。父親はその息子を教え，諭し，小言を言いましたが，息子はてんでまともになる気配がありませんでした。ある時父親が市参事会から帰って来ますと，息子が玄関の窓枠に立ち，窓の外に向かって放尿，すなわちおしっこをしていましたが，父親が目にとまると放尿をやめ，窓から家の中へひっこみました。父親はそれに気付くと，こう考えて嬉しくなりました。「あれは分別が出てきた徴候かもしれない。」すなわち息子が父親の手前，気を使ったと思ったのです。そこで父親は息子のところに行き，「窓枠に立って放尿していながら，わしを見るとなぜ逃げたのか」と，尋ねました。息子はこう言いました。「それはだね，父さん，僕は父さんに小便をたぐられて，窓から外へ引っ張り出されるんじゃないかと思って，それで逃げたんだよ。」そこで父親は息子がまともになる気配がないことがよく分かり，教育をやめ，息子を阿呆のままにしておきました。

同様に，聖油も洗礼も無駄で，改心しそうもない若者が大勢たむろしています。というのは（フランシスコ・ペトラルカ[1]が言うごとく）木に花が咲くならば，実も結ぶのではと期待されているからです。同様に若者は，常とはかぎりませんが，次のような場合が一般的です。若いうちは躾よく，礼儀正しいのに，年をとると食い道楽や色気違いになるのです。「若き天使，長じて老いたる悪魔となる」のです。[Angelicus iuvenis, senibus sattanisat in annis.（天使のような若者，年をとればサタンのごとく振舞う）]

第四章　阿呆についての章

前話では馬鹿な息子の話をしましたが，修道士ヨハネス・パウリはかね

1　ペトラルカ（1304－1374）ルネッサンス期のイタリアの詩人

てより様々な悪徳を戒めるために，説教師の話の種になる阿呆を何人か挙げようと思っていました。以下ではそういった阿呆について順次お話しましょう。

第二十三話　まじめ
撲たれないと歩かない道化のこと

ある時一人の道化が主人から別の人に贈与されました。下男が二人，この道化を迎えに行って，連れ帰るよう命令されました。そこで二人の下男がこの道化を外に連れ出すと，下男がずっと前方を歩いているのに，道化はゆっくり後からついて来るありさまでした。
二人の下男は絶えず道化を待ち，口汚く罵り，怒鳴りつけなければなりませんでした。その時道化はこう言いました。「道化は撲たれないと何もしないものなのさ」そこで二人の下男は長いむちをつくり，道化をしたたか撲って，急き立てました。道化はズボンをはいておらず，下男はそのむちで数回道化の脛を撲ちました。道化はむちの痛みを感じると素早く歩き，そして走り始めたので，むちを持った下男は道化に追いつけないほどでした。

同様に，病気，ペスト，その他の疫病というむちで撲たれ，強いられないと天国への道を歩まない人々が大勢います。そういう人々は飼い主に撲たれると十数回も飼い主のまわりを走り，やがて部屋の隅にうずくまって，黙ってしまう犬に似ています。――女性のなかにも撲たれたい人がいて，こう言います。「夫に撲たれないと，夫が好きになれません。ところが夫が私の身を案じ，私を監視し，私を撲ったりしますと，夫が好きになります。そして夫も私が好きだということがわかるのです。」もっとも撲たれることを好まない女性や犬もいます。それ故もし神があなたを艱難辛苦というむちで撲つならば，それは神があなたを愛しているという印なのです。[知恵の書第四章][1]。

1　旧約聖書続編「知恵の書」なお上記の文はその第4章には見当たらなず，第3章第5節にそれらしい文がある。

第二十四話　冗談
城にたどりつけなかった犬のこと

愚かな犬が一匹おりました。その犬がとある谷へやって来ました。そこには山が二つあって，それぞれの頂上に城がありました。その城では食事の間じゅう，衛兵が笛と太鼓で音楽を次々に演奏する習慣がありました。一方の城で笛が鳴り始めると，犬はこう思いました。「あそこで今食事中だ。あの城へ行こう。」犬が山を半分登った時，衛兵が笛を吹くのを止めました。そしてもう一方の城の衛兵が笛を吹き始めました。そこで犬はこう思いました。「あそこではもう食事は終わった。もう一方の城で今食事中だ。」そして走り下りて，もう一方の山を登りました。その直後そこの衛兵は笛を吹くのを止め，またもう一方の城の衛兵が笛を吹き始めました。こうしてその哀れな犬は，一方の山からもう一方の山へと走り，結局どちらの食事にも間に合いませんでした。

同様に，無定見な人が大勢います。この世の喜び，楽しみと同時に永遠の生命を得たがります。殆ど年中現世の喜びを追いかけているくせに，斎日[1]になると告解，秘蹟参列，その他の善行によって永遠の喜びに与かろうとします。しかし長続きしません。このようなことは殆ど毎日起こっています。朝には神への，ミサへの，説教への道を進みながら，ご馳走を食べた後は悪魔への，慰みごとへの道をたどり，それを死ぬまで止めません。私達も先の犬のごとく，お祝いに遅れないように注意しなければなりません。

第二十五話　冗談
百姓が一匹の兎を追いかけたこと

阿呆頭巾をかぶりそうな百姓がいました。この男は庭園を持っていましたが，そこに兎が一匹入り込んで，この阿呆の考えたとおり，沢山の損害を与えました。それである貴族に頼んで，兎を追い出してもらおうとしま

1　断食・減食の日，または肉など断つ日。これは罪の悔い改めにふさわしいとされる。

した。貴族は馬でやって来たのですが，犬を五，六匹連れて来て，庭の中で大きな叫び声をあげて兎を追いかけました。兎は彼らからのがれ，垣根を抜けて逃げてしまったので，彼にとってはなんの得にもなりませんでした。兎が十年間に与えたよりも大きな損害を，この犬を連れて来た騎士は，一時間でこの百姓に与えたのです。この百姓は兎に仕返しもしようとしたのですが，彼にはなんの得にもにもなりませんでした。

他人の罪を水に流して許そうとしないで，復讐しようとする嫉妬深い人が沢山います。復讐ということは神に属することで，彼らは神の力に手を伸ばすことになります。それを長くやれば，自分自身に大変な損害を与えることになるのです。モルデカイを吊るす絞首台を作らせ，自分がそれに吊るされたハマンのようになるのです[1]。――要するに他人に墓穴を掘れば，自分がその中に落ちるようになるのです。彼らが世俗の法から逃れ，法が彼らを罰しなくても，神の力からのがれることはないのです。彼らが神の力に手を伸ばしたために，神は彼らを罰せられるのです。[詩篇十七：Michi vindictam etc.（私に復讐を，云々）]

第二十六話　まじめ
賢者が愚か者に従うこと

ある時二人の兄弟がいました。一人は愚か者で，もう一方は賢い人でした。二人は一緒に旅をして歩いていました。分かれ道にやって来ましたが，その一方は平らで楽そうでしたが，もう一方の道は石だらけの厳しい道でした。二人はどの道を進むのかを言い争いました。賢い方は険しい道を，愚か者は平坦な道を進もうとしたのです。長い間言い争った後，愚か者はよい道を進みました。賢者は道連れをなくしたくなかったので，愚か者に従って進みましたが，二人は捕らえられて城に連れていかれ，塔に閉じこめられました。塔に閉じ込められていた時に，二人はまた言い争いをしました。賢い方が言いました。「これはお前のせいだ。おれ達が険しい道を進んでいたら，こういう羽目にはならなかったろう。だが私はお前に従わざるをえなかったのだ。」愚か者が答えました。「あなたは賢く，私は愚かで

1　旧約聖書　エステル記

す。私は自分の気の向くままに行いました。あなたが主張を変えなければ，あなたについて行ったでしょうに。」云々。

つまりこの宗教的意味は，肉体と魂が兄弟であり，肉体は愚か者で官能的で，魂は利口であるということです。肉体はこの世では罪の楽しい道を進もうとし，魂はその後ろについて行きます。それで両者は，永劫の罪という塔の中で，永遠に非難を共々受けることになるのです。だから魂は肉体に従ってはならないのです。

第二十七話　冗談
赤頭巾のことだけを嘆いたある男のこと

ある時ある男が捕らえられ，実際そうなったのですが，絞首刑にされようとしました。彼が引き出された時，塔の牢獄に置いてきた赤頭巾のことだけを嘆いていました。彼は何を話しかけられても，「赤頭巾があったらなあ」と，赤頭巾以外のことは何も言いませんでした。

このように，いまはの際になっても，神のことや罪の悔悟を気にかけなければならないのに，愚かなことで悲しんでいる人が沢山います。例えばフランシスコ・ペトラルカはこう言っています。[Quamdiu spiritus est in corpore, liber est animus（霊が肉体の中にある限り，精神は自由である）]「霊が肉体の中にある限りは，精神は自由である。それが神に向かおうと，神にそむこうと。」

第二十八話　冗談
泥棒がパンの粉を払ってくれるように頼んだこと

ある時一人の男を絞首刑にしようとして，引っ張り出しました。パン屋の前にさしかかると，店には焼き立てのパンが並べてあり，本当にいい匂いがして，この哀れな男は欲しくてたまりませんでした。彼は言いました。「白パンを買ってくれる人がいればなあ。」刑吏は白パンを買うために一ヘラーを与え，パンの片隅を一かけらちぎって，彼の口に入れてやりました。すると泥棒は言いました。「旦那様，パンの底の粉を払って下さい。それは体に悪いと言います。」刑吏は言いました。「お前がまだ生きている間は，体は悪くない。」

このように多くの人々は，いまはの際に，受けた教えに従って，若い頃に慣れた行動をします。この世から別れなければならなくなると，気晴らしや満足を追い求める，別の人々もおります。

第二十九話　冗談
狐が絞首台に引かれてゆく時に望んだこと

ある時一匹の狐を引き出して，絞首刑にしようとしました。狐が沢山のあひるやがちょうや鶏を盗んだからです。狐を引き回す時，右手の通りを進んで絞首台に行こうとしました。すると狐は，自分を連れていく人々に，左手の別の通りを引っ張って行くように頼みました。人々が「なぜだ」と聞きますと，狐は言いました。「その通りには沢山のがちょうがいて，最後に私の目を楽しませることができるからです。」

臨終の床でも気晴らしをしなければならない人々は，沢山おります。ある人はグルデン金貨を持ってこさせ，また別の人は売春婦に来るよう命じさせて，自分の罪を嘆き，神に背く行いをしたことを嘆くよりは，そういうことが許されなければならないと，より一層嘆きます。賢者が言っていますように，別れはつらいものです。［シラ書第四十一章：O mors（ああ死よ）］ああ死よ，自分の財貨の中に楽しみを持つ人間にとって，お前への思いはなんと厳しいことでありましょう。死への思いがそのように厳しいものであるとすると，死そのものはなんと厳しいものなのでしょう。

第三十話　冗談
ある女房，サラダ菜の代わりに宝石を与えたこと

昔，ある男が四十グルデンで高価な宝石を買って，それを大切にとっておくようにと女房に与えました。ある時この女房は，むしょうにサラダ菜が食べたくなりました。たまたま一人の女がサラダ菜を持ってやって来ました。その女はとても美味しそうなサラダ菜，芥子菜，レタスと新しい玉葱を運んで来たのでした。この女房はそれを買いたいと思いましたが，金は一文も持っておりませんでしたので，その女にサラダ菜の代わりに高価な宝石をくれてやりました。

この女房も思慮が足りませんでしたが，こういう女を馬鹿者呼ばわりし

ながら，自分自身が馬鹿げた事をする人は多いものです。つまり浮世のことの代わりに永遠を見捨て，世俗を求めて神事をおろそかにし，一ペニヒに代えて掟の中の神をないがしろにするのは，一服のパイプタバコに代えて立派な馬をくれてやった阿呆と同じことです。

第三十一話　まじめ
夫が首かせを受けたこと

昔，罪を犯した一人の女がいました。その女はあちこちの村で行われているように，その悪業が書き記してある書面を額に張りつけて，首かせをつける公開の処罰が行われることになりました。こういう場合，他の二，三の町では晒し籠が用いられていました。その女の夫は妻を大変愛しておりましたので，当然阿呆どもの仲間になることになり，町のお偉方達と話し合って，妻のために金を使いました。こうして夫は妻に代わって晒し柱を担ぎました。言いかえれば妻に代わって首かせをはめられたのです。その後，この二人は仲違いし，喧嘩をするという事態になった時，妻が夫を罵り，それどころか，見も知らない他所者の前で，「私はまだお前さんのように首かせをはめられたことなんかないんだよ」と，言いました。これは，まことに大変な忘恩行為でした。妻が咎め罵った夫の恥を招いたのは，妻自身の責任でした。だから夫が受けた罰は妻が受けるべきものでした。

主イエス・キリストにも私達にも，事はこのように運ぶものです。私達は罪を犯して苦しみ悩み，罪業を背負って死ななければなりません。そして神の子キリストは私達に対する優れた愛情のために人間の姿を身に付けて，私達に代わって罰を受け，むごい死に方をされました。キリストを責め罵るのは人間達であり，それは神を瀆す者どもであり，神を呪う者達でもあります。あなたがキリストの意に反して，その脳，肺臓，腹わた，肝臓，傷，失神などと無作法にもあげつらう時に，このことは起こるのです。そしてあなたはハム［創世記　九章］よりもっと呪われるのです。ハムは一人の人間の隠れた身体をむき出しにしたからです。あなたは主イエス・キリストの隠れた身体をむき出しにしたことになります。主はあなたのために神として人間になり給い，あなたのためにはりつけにされて死に給うたのです。だから，このことについて次のような詩句が作られています。

Est amor ingratus, cum non sit amator amatus.
Illi pena datur, qui semper amat nec amatur.
（愛する者が，愛されないが故に愛は報われぬ。
常に愛しながら，愛されぬ者は罰せられる）

第三十二話　まじめ
阿呆が討論で賢人をまかしたこと

ローマの町が一部建設された頃，ローマの人達は市参事会からアテネへ向けて誠実な使者を送り，アテネの人達にそこの法律，諸条例や，組織・制度などを送ってほしいと伝言させました。というのは，アテネには立派な大学もあり，その町は立派に治められていたからです。アテネの人達は都市法と諸規定をたずさえた一人の学識者をローマに向かって送り出しました。けれどもその学識者は，ローマへ着いてもローマ人達に法規などを読んで聞かせたり，手渡してはならない，ローマの人達がそれらを受ける資格があるかどうかを前もって討論して試し，しかも手話と暗示でもって討論しなさいと言う命令を受けました。

ローマの人達はこれを聞きましたので，一人の阿呆に立派な美しい上衣を着せ，頭にはきれいな赤くて高い角帽をかぶせました。そしてそのギリシャ人が討論に勝ったとしてもその人は一人の阿呆に勝ったにすぎないし，もしその阿呆がアテネの学者に勝った場合には，ローマの人達全部が勝ったことになろうと考えました。さて討論が行われる時刻となりましたので，参事会とそこで傍聴しようとした人達誰もが出席しました。ローマの人達は，その阿呆をアテネから来たギリシャ人に対面して椅子に座らせました。この阿呆には，一言も喋ってはならぬと言う命令が下されていました。このギリシャ人はその阿呆が堂々とした様子でしたので，学識の高い人物だと思っていました。

このアテネのギリシャ人は討論を開始して，人差し指を一本上へ差し上げました。まるで神はただ御一人のみであると解すると言おうとするかのようでした。例の阿呆はそれをギリシャ人が，その指で自分の一眼をえぐり出そうとしているのだと解しましたので，阿呆は指二本を差し上げました。まるで次のように言おうとしているかのように。「それじゃわしはあん

たの両目をえぐり出してやろう。」ところで指を二本伸す時には，親指も伸すのが普通のことです。そこで，アテネのギリシャ人は，相手が真の神の中の三位一体を知らせようとして，指を三本伸したのだと理解しました。それからギリシヤ人は，主なる神には全ての事がお見通しで，よくお分かりであるという事を知らせようと思って，五本の指を伸した平手を差し上げました。阿呆はこれを見て，相手は自分の頬に一発くらわせようと思っているのだと受け取って，ギリシャ人の頭に一発げんこを見舞ってやろうとするかのように握りこぶしを固めました。これをギリシャ人は，神はその神の御威力の中にすべての物を掌握し給い，主なる神の判断は人目につかなくて，すべての人に隠されたものであると理解しました。

このようにしてアテネのギリシャ人は，ローマ人達は法律を受けるにふさわしいと認めました。つまり，この阿呆が沈黙のまま喋らなかったので，ローマには学識者達がいると思ったからです。この阿呆をそのギリシャ人は賢い学識豊かな男と見なしました。しかしもしこの阿呆が喋ったら，この男がどんな人間なのかすぐに分かったことでしょう。このように今でも多くの参事会のお偉方達はこの手を用いております。

第三十三話　冗談
悔やみを言われておかしなお礼を言った男のこと

前述の阿呆に起きたようなことがまたありました。ある時父親を亡くした息子がおりました。さて父親を埋葬し，人々がそこに立っていると，いくつかの町や村の習慣になり，行われているように，誰もが彼のところへやって来て，彼にお悔やみを言いました。人々が彼に父親のお悔やみを言うと，「あなた達の父親も死んでくれたら有難いのだが。そうしたら私もあなた達のところへお悔やみを言いに行くつもりですよ」と，彼は言いました。そこで黙っていれば，彼も賢いと見られたことでしょう。

ですから誰もが自分の言に注意し，自分の話していることをわきまえるようにして下さい。舌先で，出身地やその人柄が知られます。「牡牛は角で分かり，男は言葉で分かる」と，世間では言っています。

第三十四話　冗談
阿呆を侮った男のこと

ある時雨が降りましたが，その雨にあたった者はみんな子供や阿呆となって，子供じみたことや馬鹿げたことをしました。たまたま利口な男が通りかかって，老人達が裸になって走ったり，木馬にまたがるという馬鹿げたことをしているのを見て，男は彼らみんなを馬鹿だと思いました。彼らもその男を馬鹿だと思い，あざ笑い，はやし立て，手をたたきました。男は彼らに阿呆になった次第を尋ねました。阿呆達は男にむかって，「雨が降って，その雨にあたった者は子供じみたことをしたり，馬鹿げたことをしなければならなくなったんですよ」と，言いました。利口者は，もうその雨水は見つからないのかどうか尋ねました。「駄目です」と，阿呆の一人が言いました。すると「大丈夫だよ。そこの溝にその雨水がありますよ」と，もう一人が言いました。そこで賢い男は腹ばいになって口を溝に押しつけて飲んだ後，手を溝に突っ込んでその水を頭にかけ，体を洗いました。するとたちまちこの男も阿呆になり，同じ様に馬鹿なことや子供じみたことをしました。

つまりこの例は多くの宗教的なことに適用されます。今悪徳を憎みながら，その後すぐ悪徳を犯し，近所の者達から悪徳を学ぶことになる人がいるからです。悪い阿呆が善良な阿呆を，自分達と同じにしないというので，阿呆を非難することがよくあります。善良な者はこのことを喜んで耐えなければなりません。聖パウロは［コリントの信徒への手紙一，第三章：Si quis vult sapiens esse in hoc seculo stultus flat, ut sit sapiens.（もしこの世で賢者であらんと欲する者は，賢者であるために愚者になれ）］「この世で賢者でありたいと思う者は，賢者になるためには，愚者になりなさい」と，言っています。

第三十五話　冗談
チーズの番をすることになった猫のこと

ある時一人の百姓がいて，うすのろだったんでしょう。彼は上等のチーズを桶だか戸棚だかの中に入れていました。そこへねずみが来て彼のチー

ズを食べました。百姓は大きな猫を飼っていたので，チーズの番をするようにと猫を桶の中に入れました。猫はねずみとチーズを食べてしまいました。

ときに聖界や俗界の偉い方々も同じようなことをします。貧しい人達を保護したり，処罰するために役人をおきます。しかし彼らは貧しい人達からできる限りその財産を取り上げ，命を奪い，貧しい人達の血の汗を飲み干すものです。田畑の番人や見張りをおいたところで，誰も貧しい人を守ってはくれません。彼らは時には葡萄園で，時には菜園で貧しい人達の大損害になります。家の中で濡れないで住むためには，屋根に雨がかからないように，何人もの屋根ふきが屋根の上にさらに屋根をふく必要がありましょう。

第三十六話　まじめ
怪我をして正気になった男のこと

ある男が病気で頭がおかしくなり，馬鹿になってしまいました。あるときこの男が以前よくしていたように，町の中をあちこち走り回っていました。そこへ幼い子供達が，大きい子や小さい子もやって来て，踊り，囃し立てて，その男を怒らせてしまいました。そこで男は一人の子の髪を摑んで，ぐいと引っ張りました。そこに別の子が来てこの阿呆の頭を棒で殴り，傷を負わせたので，彼の頭から蒸気と煙が立ちのぼりました。そしてこの男は一瞬にして正気になり，頭が冴えました。そこでこんなにも多くの子供達の中にいるのを知って，恥ずかしくなりました。正気を失って，こんなに多くの子供に取り囲まれている時どんな気がしたか尋ねられると，自分はローマの王か皇帝で，アレキサンダー大王がしたような大戦を戦い抜かなければならず，みんな自分の傭兵で武装した部隊だと思ったと，答えました。

阿呆を助け，狂った者達を正気にするには，頭を開き，そこから蒸気を出さしてしまうより良い薬はありません。このことについてよい詩があります。

O medici, mediam capitis pertundite venam!

（おお，医者よ，頭の中央の血管を貫きなさい）

第三十七話　冗談
はえのために家を燃やした男のこと

昔一人の阿呆がいました。ある時，はえがいつもよりうるさかったので，はえを敵のように憎みました。そして辛抱しきれなくなって，はえを焼き殺そうとして，自分の家に火をつけ，燃やしてしまいました。

時とすると，ふしだらという地獄の蚊に刺される多くの人々もこのようなものですが，こういう人々はすぐ罪に落ち入るようなことをし，小心で，自分自身への不安が少しであるということに我慢できないのです。また自分の家，つまり自分の肉体を，飲食の無分別な節制で駄目にして早死にをし，自分自身の生命を摘み取って，誘惑からまぬがれる人々もおります。それは愚か者のすることなのです。なぜならダヴィデが詩編の中でこう言っているからです。[詩編第二章：Erudimini, qui iudicatis terram.（土地をいかに査定するかを学べ）]「土地を査定するもの達よ，教えられねばならぬ。」土地はあなたの肉体であり，分別を以て行われるように，それを判断することを学ばねばならないのです。聖パウロはこう言っています。[ローマの信徒への手紙第十二章：Rationabile obsequium vestrum.（あなたがたの道理にかなった服従）][1] ここの例は，仕返しが適切でない人に対する有益な話であって，先に述べた兎を追い払った人の話と同じことなのです。[2]

第三十八話　まじめ
二人の阿呆がなぐりあいをしたこと

私はある阿呆の話を読んでおります。この男は人のそばを通る時，棍棒の代わりに手に持っている杖で，その人を叩く習慣を持っていました。しかし痛い目にあった人は一人もいません。そっと触れるだけで，笑って通

1　新共同訳聖書では，「あなたがたのなすべき礼拝」とある。ルターのドイツ語訳は euer vernünftiger Gottesdienst. であるが，Kürschner 版の F. Bobertag の注は euer vernünftiger Gehorsam. となっている。

2　第25話参照

り過ぎて行ったのです。ある時こういうことが起こりました。あるよその阿呆が，この阿呆の住んでいる町にやって来ました。このよそ者も手に杖を持ち，同じような習慣を身につけていて，人のそばを通る時，その杖で叩きましたが，痛い目にあった人はいませんでした。

ある時この町の阿呆が，よそ者の阿呆のそばを通りかかり，自分の習慣で彼を叩きました。よそ者の阿呆も習慣で，この町の阿呆を叩きました。[1] この町の阿呆は，よそ者をまた叩きました。よそ者の阿呆は，この町の阿呆を叩き返しました。こうしてこの後二人が次々に，また代わる代わる叩いて，どちらも止めようとしないで叩きあい，最後には二人とも動けなくなって，まるで死んでしまったかのように並んで横になっていました。その後どちらも人を叩かなくなりました。そして二人が出会うようなことがあると，お互いに別の通りや，通りの反対側を歩き，そのうえ人がいると，その人達に向かって，どちらも言いました。「阿呆がいる。用心しろ。あいつは人を叩く。」

このように多くの人々が愚か者なのですが，特に，お互いに平和に暮らそうとしない，偉い方々はそうなのです。少し腹の立つことがあると，復讐しようとします。そして互いに軍を進め，国や人々を滅ぼし，互いに住民を斬り殺します。戦争中に普通起きるような大損害の後，調停されて，仲直りに同意します。それで世俗の諺にもこう言われています。[Stultus post damnum pactum facit.（阿呆は損害の後で和解する）]「損をした後で，阿呆は仲直りをする。」

第三十九話　まじめ
損害の前の平和のこと

ある時，いつも通り大きな大砲や沢山の武器を持って，人々が戦争に出かけました。その時一人の阿呆がそこに立っていましたが，それはどんな騒ぎをするのだと尋ねました。「戦争に行くのだ」と，人々が言いました。阿呆は聞きました。「戦争に行って，何をするのだ。」人々は答えました。「村を焼き，町を手に入れ，ぶどうや穀物を駄目にして，殺し合いをするの

1　ここの文章は J. Bolte 編の原文には脱落しているので，H. Österley 編より補って訳した。

だ。」阿呆が言いました。「なぜそんなことが起こるのだ。」「仲直りをするためだ」と，人々は言いました。するとこの阿呆が言いました。「そんな損害を避けるように，その前に仲直りをする方がいいのだろうに。そうするとおれの方が，みんなの主人より利口だ。おれに命令されたら，損害が起きる前に仲直りをし，損害が起きた後では仲直りはしない。」

第四十話　冗談
綱渡り師が落ち，阿呆が泣いたこと

ある阿呆が同じようなことを言いました。ある男がいて，お金を沢山もらえたら，綱渡りの曲芸をやろうとしました。ある時最後になって，市民にただで綱渡りを見せようとしました。誰もなにも払う必要はありませんでした。彼は綱を路地の上に，家から家へと張りました。曲芸師は大げさな身振りをして，綱の上に飛び上がりました。しかしどうしたのか状況を見誤って，下に落ちて怪我をしました。失敗した人がいるとそうするものですが，見物人はすべて笑い，彼を嘲笑しました。そこに立つていた阿呆だけが例外でした。この愚か者は泣き出して，涙が止めどもなく流れました。それで人々は彼に言いました。「これはどうしたんだ。世間の人がみんな笑っているのに，おまえは泣いている。」彼は答えました。「はい，私が泣いてはいけませんか。私は阿呆と言われていますが，この人よりは利口です。神は人間に大地をお与えになり，人間はその上を歩かなければならないのに，この人は空中を歩こうとします。それで泣いているのです。」

そのことでダヴィデはこう言っています。[詩編第百十三章[1]: Celum celi domini, terram autem dedit filiis hominum etc.（天は主の天，だが地は人の子らに与えられている）]

1　新共同訳聖書では第115章，16